

海外に日本の技術を

12月10日、昭和46年度第2次海外協力隊派遣員の壮行会が日本青年海外協力隊本部（渋谷区広尾）で行なわれました。

アジア・アフリカを中心とする開発途上国への技術協力を目的として、昭和40年に発足した日本青年海外協力隊の派遣も今年で6年目を迎え、派遣されたボランティアの数も1000人を越えました。今回はフィリピン・ラオスなどに男女あわせて72人が派遣されました。

隊員は3カ月間の厳しい訓練を終えたばかりの若者たち、これから向う2年間の海外生活を通して日本の技術を紹介し、大きな成果をあげることでしょ。

ダイレクトメール 師走をかける

あわただしい年末、お歳暮の買い物客で街はあふれるばかりの人、人、人。いろいろなアイデアに富んだキャッチフレーズが人目をひく。ラブリークリスマス、だんろのあるクリスマス、白いくつのクリスマス、商魂ここにあり。ここ7年間のミスユニバースの平均プロポーションにピッタリ合った方に100万円のダイヤを散りばめたクツをプレゼントしようというデパートもあらわれた。シンデレラの夢を私に挑戦するお嬢さん達。田舎へ声をそのまま便りにして送ろうというアイデアも実現、2分間の声の手紙がソノシートになる。

こんな企画を知ってもらいお客様に来ていただこうと、どんどん発送されるが、ダイレクトメール。情報化時代の波にのって増える一方、機密の顧客名簿はズラリ並んで、北は北海道から南は沖縄、はては韓国の名簿までそろっている。自動封入装置で1分間に100通も出来上がる。あるデパートでは年間6000万通にも及ぶという。こうして送られたダイレクトメール、今年はずいぶん全郵便物の4割を越えた。

そんな折、行政管理庁はダイレクトメールは郵便ではなく広告だと、

『民間の業者にまかせるべきだ、郵便運配の犯人ではないか』

一方、ダイレクトメールといえど個人宛ての信書ですからと

『収入がばかにならない。これでこそやっつけられるのだ、運配のないよう配慮はしてある』

と郵政大臣。

運配にしびれを切らし配達をかって出た都下のある大きな団地の郵便ママさん。せっせと配達をするのだが、ある主婦は

『見ないでゴミかごに棄てる方ですね、受け取って迷惑する時が多いですね』

これでは泣けますと郵便ママさん

『せっかく配達したのですからぜひ見ていただきたいですね、お願いします』

様々の思惑を他所にイメージ戦略のいない手ダイレクトメールは情報化時代の波にのって師走の街をかけまわっている。